

歴史民俗資料館だより

せんぼこ 千歯抜き・足踏脱穀機

千歯抜きは、木製の台木に鉄・竹・木の穂（歯とも言う）を櫛状に並べて固定し、歯と歯のすきまに稲や麦を差し込んで抜く脱穀用具です。また、千歯・稲扱・万歯ともいいます。台木は赤松材で作られ、両端に脚を差し込む角穴を二個ずつ持っています。鉄の穂は一七〜二三本あり、一〜二ミリ程度の間隔（目）にそろえて固定してあります。脚に踏板を渡して踏み、穂の間に稲穂を差し込んで手前に強く引っ張って籾を梳き落します。明治時代にはさまざまの改良が試みられ、木製の枠に千歯を取りつけ、四方から抜けるようにした稲扱枘や扱枘などもありました。

千歯抜きが発明されたのは、江戸時代中期のこととされています。それ以前は扱き箸といって、二本の竹箸で穂先を挟んでしごいて籾を落とすような、非常に能率の悪い作業でありました。実際には、千

歯抜きの能力は以前の脱穀方法に比較して能率が非常に高かったです。明治末期から大正時代にかけて、これよりさらに能率のよい回転式の足踏脱穀機が普及しはじめ、千歯抜きの時代は終わりを告げましたが、その後も種籾とりなどには使用されてきました。足踏脱穀機では歯、穂が痛んでしまうからです。

足踏脱穀機は、刈り取った稲や麦の穂を扱いで籾にする脱穀機の一つで、足踏みの力を動力とするものです。脱穀作業は、原始的には二本の細い棒を立て、その間を通して抜きとるものです。また、何本もこの棒を並べて、その間を通して抜いたりするものもあります。足踏脱穀機は新しく登場した機械式のもので、回転する胴に銅線をV字形に曲げた扱き歯を千鳥形に何本も立てたもので、従来とまったくかわった原理であります。

この回転運動を胴に与えるために足踏みの板を取り付けて、その板の往復運動板を取り付けて、その板の往復運動をクランクを介して回転運動にし、その回転を扱き胴に与えます。扱き胴の

回転数が毎分一〇〇〜一五〇回になるように足踏板を動かしながら、両手で持った稲や麦の束を適当な角度にあてて穂を抜くのです。足踏脱穀機の上には、扱いだ籾が飛び散ららないように筵で覆いをかけました。足踏脱穀機は、従来の千歯抜きによる脱穀に比べ著しく作業能率が良かったので、大正時代には急速に全国に普及しました。この地域では、ほとんどが米用に使用して、麦扱きにはあまり使われませんでした。米の収穫の時期には、あちらこちらの田んぼから脱穀機の音が聞こえてきたといえます。

資料館では、町民のみなさんから寄贈していただいた千歯抜き・足踏脱穀機を民俗資料として保存しています。

☎ 388-0161
FAX 388-0185



ごみ減量化コーナー



1人一日100グラム
ごみ減量運動実施中

Reuse (リユース) しましょう

使わなくなったものを捨てる前に、もう一度修理したり、他の人に譲って使ってもらおうなど、もう一度活かす道を考えて下さい。

- ・電気製品や家具、おもちゃなどは大事に使い、壊れたら修理して使う。
- ・繰り返し使えるリターナブル瓶の商品を買うようにする。
- ・詰め替え式のシャンプー容器は何度も繰り返し使う。
- ・古くなった洋服を作り直したり、雑巾に利用したりする。
- ・欲しい人に譲って、使ってもらおう。

Reuse (リユース) 「使えるものは、繰り返し使う」